

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来の<sup>あした</sup>森づくり基金レポート

# モリイク

MORI - IKU

森に行こう。  
森で育とう。  
森を、育てよう。

vol.18  
Oct. 2019

## 編集後記

今回は余市町のエコビレッジに取材でお邪魔したのですが、その時にすっかり感心したのが、みんなで食べたおいしいランチでした。その日は一般の参加者も集まってハーブについて学ぶ講座だったのですが、お昼のランチの豪華でおいしいことといたら、その材料の多くが敷地内で採れた作物だったり、近所の農家のものだったりするのです。

農業や機械を使わないで自給自足的な生活で、便利さを捨ててストイックな暮らしぶりのイメージがあるエコビレッジですが、なんとまあ豊かで贅沢なこと。このランチが象徴するのは、自給的で持続的な暮らしを目指しても、それは必ずしも清貧でストイックな暮らしではないのだということ。そして人と環境を含めた豊かな周囲とのつながりの中で、これほどの食卓を楽しめるのだということ。

人と自然と両方のつながりをじっくり掘り下げれば、わたしたちはどれほどに満ち足りた生活ができるのだろう、そこにこそ私たちが求める豊かさというものがあるのかもしれない。そんな可能性を感じたのでした。



<https://www.facebook.com/coop.asumori>

モリイク vol.18  
2019年10月発行  
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証材およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。



今こそ、生き方を考える。

もう一度ふりかえって、  
未来のための暮らし方を。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

# モリイク

これからの世界を、  
人間らしく生きるために。

## \* contents \*

- \*02 コラム 森づくりのトレンド  
未来のための市民による森づくり
- \*04 特集 人間らしく生きる選択肢としての暮らし方  
エコビレッジライフ
- \*08 アカエソマツからつながる物語  
酒巻美子さん(パイングレース)
- \*09 もっと樹のことを語ろう  
大きな木の小さな物語
- \*10 親子で楽しむ森のページ  
森のキモイ・キレイ
- \*12 コープ未来の森づくり基金報告  
コープの森植樹祭 など
- \*15 木育essay  
手わたし(後編)

## Starting Column 森づくりのトレンド

### あした 未来のための 市民による 森づくり

今から25年ほど前になりますが、アメリカ合衆国シアトルにあるワシントン大学で1年ほど研究休暇を過ごしました。着いてすぐのころに、同僚から「森林所有者向けの公開講座を開くだけでなく、こちらの状況を知るにはいい機会なので参加してみないか」と誘われて行ってみました。何を教えるのかと思ったら、レクリエーションを楽しんだり、野生動物の住処をつくったり、暖炉の薪を自給したりするための森林づくりなど、森を使った生活を楽しむための基本やノウ

ハウを教えるものでした。参加していた人に聞いてみると、皆さん田舎暮らしにあこがれて、楽しみのために最近森林を持ち始めた方ばかりなのです。先の同僚いわく、シアトル近郊では楽しむために森林を持つ人が増えてきて、こうした講座はいつ開いても満員御礼だということでした。

昨年、アメリカの南部で林業が活発な地域に調査に行き、林業経営のコンサルタントの人からお話を聞きました。そのとき、ご自身でも森林を持っているということな

ので、どんな経営をしているのかと聞いたところ、「楽しむのため」という答えが返ってきました。木材生産は「仕事」で関わるけど、自分の森林は理想とする森をつくるために手を入れたり、散策したりする、楽しむための場なのだそうです。アメリカではプロから素人まで「楽しみ」のために森を持ち、付き合いという人々が、ずいぶん以前から数多くおり、森林所有者のなかで木材生産を所有目的としない人々が大きな割合を占めています。

最近日本では「自伐型林

業」の動きが活発になってきました。昔は、日本の森林所有者は自分たちで森林に手を入れたり伐採をして経営＝自伐林業をしてきましたが、最近では森林組合などに委託する所有者がほとんどになってしまいました。所有者が細やかに自分の森林を管理することの重要性が改めて認識され、自伐林業を見直す動きが生じているのです。

ここで自伐「型」林業と称しているのは、単に昔の自伐林業を再興させるのではなく、自分たちのこだわりのあ

る森林づくりをしたい、楽しみのための森林づくりをしたいという思いを持って、森林を新たに所有したり借りたりして森林づくりに取り組む新しい動きも含んでいるからで、実際にそうした人々がたくさん活動を始めています。また、昔から自伐林業を営まれながら、新しい森林づくりに取り組んでいる所有者の方々もいます。栗山町のIさんや、厚真町のHさんなど、昔から農業と林業とをあわせて営んでおられますが、森林づくりも木材生産だけを考えるとよりは、人々

と森とのつながりができるような森林づくりを進めておられ、多くの市民が豊かな森を楽しむ機会を提供されています。お二人ともに、農業と関わらせながら地域の環境に配慮し、そして市民と森林の付き合いが深まるような森林づくりをすすめています。

こうした取り組みに学びながら、自分たちの暮らし・生活の延長線上で森と付き合いが広がっていくと思います。▲



柿澤 宏昭  
(かきざわ ひろあき)

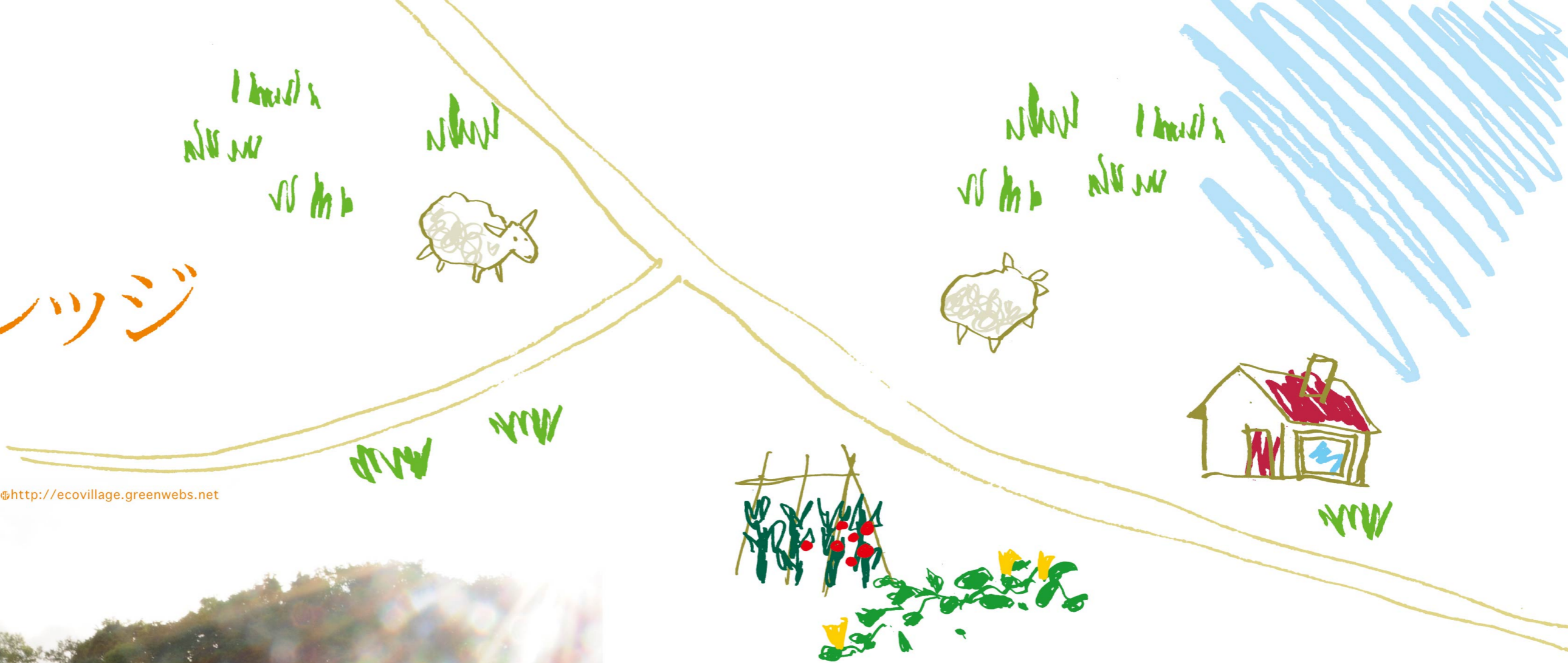
北海道大学  
森林政策学研究室 教授  
コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。

人間らしく生きる  
選択肢としての  
暮らし方

# エコビレッジ ライフ

NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト <http://ecovillage.greenwebs.net>



## エコビレッジって どんなところ？

エコビレッジというのは聞いたことがあるのだけど、どんな「村」なのかはいまひとつイメージがつかみきれない。でも森づくりや環境問題に関心を寄せる私たちは、それがどんなものなのか興味がある。きっとエコな暮らしをしているのだろう、とか、ストイックな生活なんだろうな、とか。

北海道にもエコビレッジがあるという。もう10年以上活動をしているという。そこなら、エコビレッジがどんなものなのか、正体を知ることができるに違いないと、お話を聞いてみることにしました。

## 思ったより楽しそう

余市町の果樹園を抜けて山を縫うように登る道にエコビレッジがあります。一見すると、いくつかの建物があって、元気そうな植物たちの畑や幸せそうなヒツジやニワトリが目に入る。

さあ、エネルギーも食料も自給自足でいろんなものが手作りで文明社会と手を切ったような生活が待っているにちがいない。と思ったのだけど、その日は植物のお世話や利用の仕方などを学んだり、とつてもおしゃれておいしいランチを外でいただいたりとフレッシュなハーブの香りに包まれた楽しい一日。同席している人も普通の人ばかり。あれ？ストイックな暮らしぶりはどこに？

エコビレッジといってもそのあり方は十人十色。ヨーロッパを中心に世界中に1万5千以上あるエコビレッジも、ごく限られた人が住む閉鎖的なものから誰でも歓迎のもの、宗教がベースになっているものなどその性質や形態もさまざま。そう教えてくれたのは、NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトの坂本純科さん。若い頃から登山や自然が好きで、また、大学時代は寮に住んでいたことからシェアライフに馴染みがあった。この暮らし方はたくさんの人と触れるので社会的な豊かさがある、それに経済的だしエコだし。と気づいて、もっと大

きな枠組みで実現できないかと考えたのだそう。ここに自然という要素を結びつけてエコビレッジをつくりました。

## やることは、生きるために 必要なことぜんぶ

最初は自給自足的な暮らしを仲間と寄せ集めるスタイルを目指していたのだけど、もっと間口を広げてたくさんの人とこうした暮らしを考えたり練習したりする場にしたいと、今では誰もが関わり合えるエコビレッジを目指しているのだそうです。

だからやっていることはさまざま。この日のハーブ利用のちょっとした講座のようなものから自分たちで建物を建ててみよう、というもので、生きていくために必要なことなら何でもやってみる。だから「何やってるのかよくわからない」とよくいわれるんだって。

そんな坂本さんがつくるエコビレッジ、どんなところなんだろう？

## やっていること

持続可能な暮らしのモデルづくり。無農薬で作物を育てたりヒツジやニワトリを飼ったり、建物を建てたりコミュニケーションやビジネスについて学んだりもする。要するに、人と自然、人と人のつながりをキーワードに、人間らしく生きるために必要だと思われることならなんでもやっている。



## 人間らしく生きるって？

ひとつは自然とのつながり。人も自然の一部。畏怖と感謝をもって暮らせること。もうひとつは人とのつながり。都市生活では隣に誰が住んでいるのか知らないとか、ろくにご飯を食べる時間もない中でお金だけがあっても、それは人間らしく生きることにならないのかもしれない。



## 生き方の選択肢をつくる

今の社会が持続可能じゃないって思う人は少なくない。でも社会が変革する気配もない。生き方を変えたくても、新しくゼロから始めるのは簡単なことじゃない。だから、こういう方法もあるというモデルをつくっておけば、生き方の選択肢のひとつとして考えることもできるかもしれない。



## 私たちだけ、ではダメで

最初は仲間内で自給的生活を求めようとしていたけど、仙人のようにこもっているのではなく開かれた場にしたい。だから有機無農薬の農業だけにこだわるのではなく、周囲の慣行農家とも仲良くしている。自分たちだけではなくて地域全体の意識を底上げできるようにすることが大事なのだ。



## 3.11の影響

長沼にあった最初のエコビレッジを余市に移した直接のきっかけは東日本大震災。あのとき、持続可能な社会が必要だと思った人は多かった。より広い土地で多くの人が集まって暮らしという実践の中で、持続可能な暮らしのモデルを作ることを目指した。



# エコビレッジ ライフについて 聞いてみた

「何をやっているのかわからない」とよくいわれるさまざまな活動は「人間らしく生きる」ことが目標なんだって。そんなエコビレッジについて、いろんな角度からお話を聞いてみました。



## エコビレッジで社会は変わる？

地球温暖化が進行して未来に影がさし、経済至上主義に生きづらさで窒息しそうになった時、私たちの暮らしはこのままでいいのだろうか、他に進むべき道があるのではないかと不安になります。特に東日本大震災で世の中が大きく揺れた時、社会と自分を見つめ直した人は少なくなかったはず。あれから多少の年月が過ぎて、同時に社会の価値観を見直す機運も喉元を過ぎたみたい。世の中はほとんど変わらぬまま。それでも、人間らしい持続可能な生き方を目指して試行錯誤を重ねる人々はいます。坂本さんが進めるエコビレッジのプロジェクトもそのひとつ。「手の届く範囲でモデルをつくって、それが飛び火のように広がって、ネットワークして、自分たちの得意なものをシェアする。それが現実的だし、楽しい」。その道のりはまだまだ長いとしながらも、見据える目標について坂本さんは話してくれました。



もしエコビレッジライフが人生の選択肢として取り入れられるようになったら、現代社会の生きづらさや未来への不安は豊かな「つながり」の中に溶けて、きっとそこには人間が人間らしくいられる社会があるのだろう。余市の森のほとりの空間は、そんな気配を確かに漂わせているのです。



## 日々のよろこび

無農薬の農園は作物以外の草も元気いっぱい。草取りなど、やってもやってもおいつかない労働がいっぱいあるけどたくさんの人と出会って、働いて、おしゃれで美味しいランチを楽しむ。そんな刺激的な場所だから、スタッフを含めてボランティアや講座の参加者などで囲む食卓はいつも賑やか。



## やってくる人々

国内外からのボランティアはいつも大抵2~4人くらいはいる。特に広報していなくても自分たちで見つけてやってくるのだそう。一般の会員さんのほかには、企業や行政、自治体の研修、学校の修学旅行などの団体受け入れもしているし、中には宿泊だけで訪れるお客さんも。



## 働いてるひとたち

今はインターンのスタッフが3人。決まった仕事以外は自分のやりたいことにチャレンジできる、自己実現の場になっている。一度社会に出たけど生き方を見つめ直しに来る人も。自給的生活は簡単なことじゃないし、資金がない人もいる。やってみたいと思う人がいるんことを試す機会になる。



## 森は世界を広げる

忙しくて手付かずだった敷地内の森を整備するとたくさんの驚きが。思いもよらない景色が見えたりオオウバユリの群生があったり。そこで、アイヌの人を講師にオオウバユリの根を食べる講座を開いたり生き物観察をしたりと、森に入れるようになったことで活動の幅がぐっと広がった。特にアイヌの人たちの知恵は北海道の持続可能な暮らしのヒントがいっぱいで、森はそれを生み出すところ。



## 話してくれたひと

昔から自然や登山に親しんで、学生寮の頃からのシェアライフを深めたいと世界中のエコビレッジをめぐる。長沼町で活動を始め、より広く実践的な場を求めて2012年に余市に移転。



坂本 純科さん

NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト理事長

# 大きな木の小さな物語

## ⑬ ヤドリギ

ヤドリギはその名の通り、樹上生活をする半寄生の常緑広葉樹です。漢字で書くと「宿木」や「寄生木」。葉緑体はもっているため光合成をしますが、根を樹木の枝や幹の中に伸ばして水分や栄養分を宿主となった樹木から吸収して成長しています。

さまざまな落葉広葉樹に寄生して、宿主が葉を落とすと緑色の鳥の巣のように姿を現します。雌雄異株といって雌株と雄株が分かれています。雌株には黄色や赤色の果実が着きますが、雄株は緑色の葉っぱだけです。

ヤドリギの種子はとても粘り気のある果肉に覆われています。鳥に食べられても粘液質の果肉は消化されずに種子と一緒に排出されるのですが、納豆のように、いやそれ以上に糸を引き、木の枝などに付着します。実は一度ヤドリギの果実を味見したことがあります。ちょっぴり甘くて…。それはよいのですが口の中から種子をだそうとしたら、腕をグンと伸ばしても粘液質の糸が切れずたいへんな思いをしたことがありました。

木に付着した種子は、発芽後吸盤のようなものでくっつき、やがてそこから根がでます。一部は栄養や水分を得るために枝の形成層を取り囲むように、一部は枝の中心に向かって伸びます。外側に伸びる根は吸収根、中心に伸びる根は支持根と考えられています。

発芽定着から数年すると花が咲きます。花は札幌では4月末ころです。ヤドリギは枝先に着くことが多いので見えにくいだけでなく、花びら（花被片）もクリーム色で小さいため目立ちません。

果実は落葉広葉樹の葉が落ちるころに熟します。果実の黄色いものはヤドリギ、赤いものはアカミヤドリギといいます。札幌では分布域が異なり、ヤドリギはもみじ台から野幌・大麻、アカミヤドリギは真駒内川流域など南西部に多いと感じています。みんなで協力して、分布図などをつくってほしいですね。



text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門・建設環境）。’00年から北の里山の会代表。著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理—その理論・技術と実践—：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著）WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



小さな瓶から漂うのはアカエゾマツの精油の香りです。時にはさわやかさがあふれるような元気さ、時には静かに染み入るようなふくよかさ。その香りには深い、森の豊かな懐に抱かれているような安らぎを覚えます。春に採取したもの、秋に採取したもの、葉の香りと松ぼっくりの香り…。同じ植物から採れる精油なのに、採取の時期や部位の違いで驚くほど変化に富んだ香りが楽しめる、そんな面白さに目覚め、弟子屈町を拠点にアカエゾマツの精油を使った商品を作ったり、その魅力を広める活動をしているのが酒巻美子さんです。

酒巻さんとアカエゾマツの出会いは、弟子屈町の川湯に広がるアカエゾマツの純林を歩いていた時だといいます。ふと、森に漂うすきな香りに気づきました。「なんだろう、と思って香りの元をたどると、アカエゾマツの木のうろに固まった樹液だったんです」。そこから興味を抱いてアカエゾマツの精油を探してみても、製品はおろか作っている人は全く見つかりません。「じゃあ、自分で作るしかないと思って」と、知人から精油を精製するための蒸留装置入手して作り始めたのだそう。精油の材料である枝葉は伐採後の山にそのまま捨ててしまうものなどを林業家や知り合いの山主さんから調達し、今では蒸留所も二箇所を増やして精油を作っています。

セラピストでもある酒巻さん、イベントでこの精油を使ったセラピーのワークショップなどを行ううちに大学の先生と知り合い、アカエゾマツ精油の実際的な効果について研究が進められることになりました。現在は動物の皮膚疾患などについて効果があることが明らかになっていて、畜産向けに商品が生まれています。効果の検証のハードルが高いのでまだ実現していないけれど、いずれは人間用の商品も開発してい

きたいとのこと。また、アカエゾマツから始めて楽器や映画に関わったり、ロシアの団体とのつながりが生まれ、最近は毎年アカエゾマツサミットというイベントを開いて交流を広げるなど、関係もどんどん広がっています。この活動が目指すところについては、「本来、林業では捨ててしまう枝や葉が病を癒すんです。こんなふうにして、人も地球も健康にしていけたらいいと思います」と、その思いを語ってくれました。

「自分がどうしていききたいかではなくて、アカエゾマツについていってる感じ。どんなふう広がっていくのか自分でも分からないけど、それが楽しみ」とは、アカエゾマツの活動を始めてから、予想外の方向に枝葉が伸びるようにどんどん進んでいくから。だから、行く先はアカエゾマツが導いてくれると思っているし、連れて行かれる先の風景を見ていきたいのだといいます。それから、森は自分が忙しくなってしまった時にエネルギーをチャージする場所、森に行くことでリフレッシュできるし、森の力を感ずることができるのだとか。「自然の中には人間が計り知れない叡智があって、そのほんの一部を見せてもらって、それについていけばいい。みんなも森に元気をもらえればいいのに」。自然の大きさを感ず、謙虚に見つめることで、酒巻さんは自然が導く本来あるべき自分の姿を発見したのかもしれない。

森という多様性の塊の中には、私たちの知らないたくさんの秘密があって、ちょっと扉を叩くとその秘密を少しだけ見せてくれます。そうして少しずついろんな扉を開けて森が見せてくれる未来というのは、きっとアカエゾマツの香りのように懐の深い、豊かな世界なのでしょう。酒巻さんのように森の扉を開く人が増えたら、私たちの未来もずっと豊かになるに違いない、そんなことを考えさせられました。



蒸留装置（左）を使って採れる精油は、枝葉5kgに対して40mlととても貴重。その精油を使った動物向けのトリートメント。たくさんの抗菌作用があり、皮膚疾患に効果があることが確認されている（中）。ほかにも入眠促進などの効果もあり、香りだけじゃないアカエゾマツの魅力を広めたいと酒巻さん（右）。

# Sung

スング

赤蝦夷松が導く  
つながりの話

酒巻 美子さん（一般社団法人 バイングレース）  
<http://pinegrace2017.wixsite.com/akaezo>

木のキモイキレイ  
 のぞいてみたら何かがいるよ。  
 ちょっとキモいわない？  
 よく見るとおもしろい！  
 さがしてみよう、森のいきもの。  
 ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

# キミはまだ知らない？

## 粘菌のフシキな世界

PART 1



変形体 モジホコリ

動く、食べる、ウンコもする、そして突然...

粘菌は身近にある腐った木や土の中など、暗くてジメジメした場所で生きている微生物です。単細胞生物のアメーバなので、普段は小さくて目には見えません。でも成長したり、合体したり、時には大きく姿を変えて目に見えることもある面白い生き方をしています。

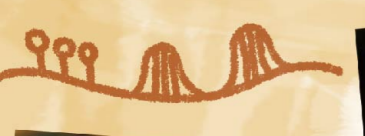
粘菌の存在を有名にしたのは、南方熊楠<sup>みなみかた くまぐす</sup>という博物学者、日本の知の怪人です。宮崎駿監督の「風の谷のナウシカ」マンガ版には、粘菌がモデルの兵器が登場していますよ。

粘菌はいつもそこにいる  
 ルーペを持って探しに行こう！

粘菌はあまり知られていない森の宝物。見つけたらと森が楽しくなります。粘菌が姿を現すのは、変形体や子実体のとき。湿り気のある場所で枯れた木の側面を見て「この気持ち悪いのはキノコかな？コケかな？」と思ったら、それは粘菌の可能性大。ルーペで拡大すると、今まで見えなかった世界が広がりますよ。

雨の後や雪解けの後や初雪が降った後、  
 こんなところに注目だ！

湿った場所・腐って倒れた木の上・  
 湿った落ち葉の表面  
 苔が生えた木の皮 など



子実体 ★ヘビアカホコリ



★クダモノコリの仲間



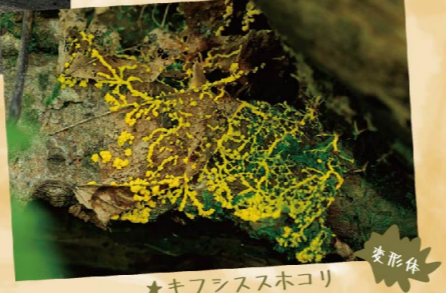
子実体 マメホコリ



★エダナツツノホコリの子実体をルーペで見る



子実体 ムラサキホコリ



★キフシスホコリ

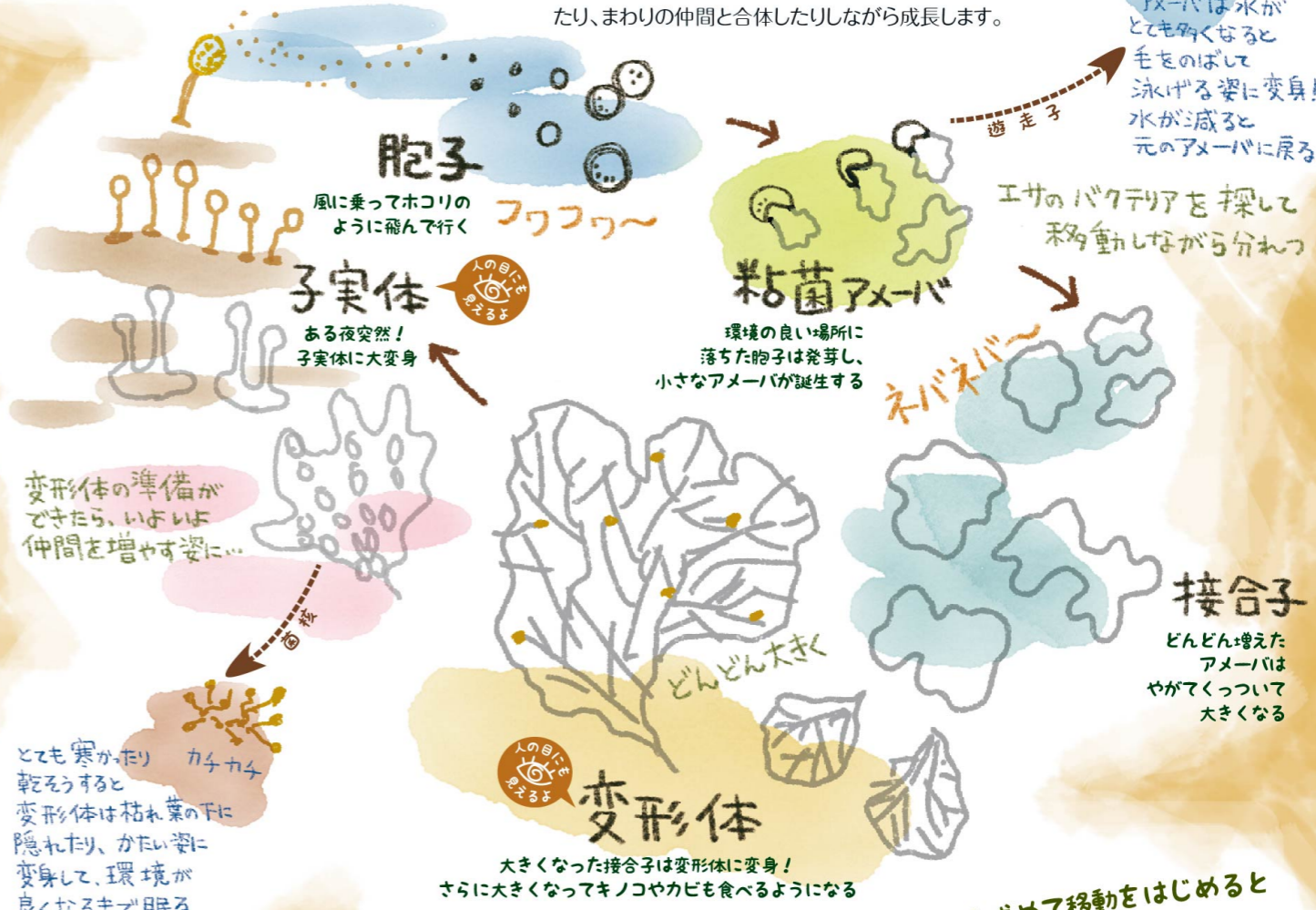
粘菌は、なぜ森にいるの？  
 どんな役割があるの？

わかりません。

粘菌は森の中にたくさん棲んでいて、森の生態系を支えていると思われていますが、どんな役割をしているのか、まだわからないことがいっぱいあります。わかっているのは、朽木の中や土の中には、まず間違いなくいること、しかもたくさんいること。おびただしい数の細菌を食べ、細菌やカビと食う食われるの競争をしていること。その細菌やカビは森の分解者の中心的存在であることから、粘菌には重要な未知の役割があるのではないかとされており、研究されています。わからないから面白い！ 森には不思議がたくさんあるのです。

キミは見たことがあるかな？  
 はいまわると虫じゃない。  
 胞子で増えるけれどキノコじゃない。  
 腐った木にはりついてるけれど  
 コケじゃない。  
 「菌」という名前がついているけれど  
 「菌類」じゃない。  
 森の中の不思議な生き物、その名は粘菌。  
 変形菌とも呼ばれる謎の生命体です。  
 森のあちこちで小さく大きくうごめく  
 粘菌の秘密にせまります。

# めぐる変わる 粘菌の一生



身の周りにはたくさんの微生物がいます。目に見えないほど小さい生き物です。その中に、原生動物という仲間がいます。原生動物には粘菌のように、不思議な生き物がたくさんいることがわかってきました。粘菌の変形体は、迷路を解いたり、人間社会の交通網を設計したりする力を秘めています。意外と賢いようです。次回は、粘菌の賢さを探ってみましょう。

③ そしてまた環境が整ったら  
 キノコのような「子実体」と呼ばれる全然違う姿に変身！ 熟すると乾いて中から胞子を吐き出します。この姿がホコリタケなどに似ているので、菌類（キノコの仲間）と思っている人も多いです。その胞子が飛んで自分の棲みやすそうな場所にたどりつくとにゅ〜っとアメーバが生まれ、また増殖していくのです。

② 食べ物を求めて移動をはじめると「変形体」と呼ばれる姿に  
 変形体は人の目に見えるほど大きく、キノコの菌糸に似ていたり、マヨネーズみたいなネバネバの種類も。この間、暑かたり、寒かたり、乾燥してたり、生息しづらい環境の時は、その姿のままひっそり眠ったり、隠れたりすることもできます。



お話を聞いた人  
**中垣 俊之 さん**  
 北海道大学 電子科学研究所

1963年愛知県生まれ。北海道大学電子科学研究所長。研究テーマは、生物の行動を物理的な視点で読み解くこと。粘菌に迷路を解く能力があることを発見した業績に対して、2008年イグ・ノーベル認知科学賞を受賞。さらには、粘菌を用いて鉄道などの最適ネットワークを設計する研究で、2010年イグ・ノーベル交通計画賞に輝く。趣味は、歩き回ること、庭で野菜を作ること。著書に『かしい単細胞 粘菌（たかさんのふしぎ傑作集）』（福音館書店）など。

ig Nobel Prize  
**イグノーベル賞**って？  
 世界の研究者が愛しあがれる？「人々を笑わせ、そして考えさせてくれる研究」に対して贈られるノーベル賞のバロディ。

森のキモイキレイ  
**次回予告!**

北海道大学には、粘菌を飼って育てて、いろんなテストをしている不思議な先生たちがいます。そのおひとり粘菌の研究で「イグ・ノーベル賞」を2回ももっている中垣俊之先生です。次号では、中垣先生の研究室の原生動物の専門家、西上先生も登場し、粘菌のすごさにもっと迫ります。

新岡薫/エトブン社  
 北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけ。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。  
 ブログ <http://etobunshaiyozo.blogspot.com/>

宮本尚/きたネット  
 森好き、ヘンなイキモノ/好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近ではキノコのトリコ、しばらくやっていたライブ活動を再開、シンガーソングライターです。  
 きたネット <http://kitanet.org>

Event Report

# コープの森 植樹祭&育樹祭

2008年から続く森づくり、  
ついに植樹本数は10万本を超えました!

コープの森  
広がれ森づくり!



南空知・石狩B地区  
61名 400本

札幌地区  
241名 1010本

旭川地区  
55名 300本

みなさんの力で10万本、  
これからも、この先も、  
森づくりは続きます!

函館地区  
58名 300本

札幌西地区  
73名 400本

帯広地区  
34名 380本

釧路地区  
54名 400本

小樽・石狩A地区  
秋に開催

室蘭地区  
103名 400本

苫小牧地区  
72名 500本

北見地区  
71名 400本

今年度、コープの森には4490本(暫定)の木が植えられました。11年目を迎えるコープの森づくりで、ついに植樹本数は10万本を超えたこととなります。これは、お買い物の時にレジ袋を使わなかった組合員さんたちの小さな積み重ねと、各地区の植樹や環境教育のイベント、それから北海道漁業協同組合連合会の森づくりなど、あすもりに関わるたく

さんの人たちの、毎年の努力によって達成できた数字です。地球温暖化を防ぎ、美しい北海道を未来の子どもたちに手渡したい。そんな思いから始まった森づくりは、それでもまだ始まったばかり。今後も健やかな森を育てていくために、みなさんのお力が必要です。来年度も、その先も、コープの森づくりにぜひご参加ください。

Event Report

森づくりは  
人づくり

円山動物園で環境教育

## どんぐりプロジェクト 2019

春、森の生きものたちの  
目覚めを観察しよう!

5/11(土)

今年もはじまった「どんぐりプロジェクト」、四季を通じて円山動物園の自然や動物たちを観察して、生きものたちの暮らしに迫ります。

今回は、春の森のみつ。まだ木々が芽吹き始めたばかりの明るい森の中では何が起きているのかな? 倒木の下ではたくさんの虫たちが動き始めて、エゾサンショウウオは産卵を終えて山に帰る途中。地面にはお日様の光をたくさん受けて、花が咲いています。まだちょっと寒いこの時期は、森の生き物たちも少なめ。ということは、競争相手が少ないということでもあるのです。動物園ではカエルやサンショウウオの説明やエゾシカの角やヒグマの話聞いて、春の森のみつを覗き込んだ一日でした。苗畑のどんぐりたちは、今年も芽を出しましたよ。大きさは去年からほとんど変わらないけど、今年も元気に大きく育つはずだから、次回も観察を続けよう!



7/29(日)

夏、食べる・育つ  
ざわめく生きものたちの  
夏の暮らしを追跡しよう

夏休みに入ってお日様もやる気いっぱい! 30℃を超える真夏日のこの日も小学生15名が参加して森の中へでかけました。今回は夏の生きものたちがどのように過ごしているのか観察してみることがテーマ。石や倒木をひっくり返してはかくれている虫たちとご対面。木々の間を飛び回るチョウや砂の中に身を隠すアリジゴク(ウスバカゲロウの幼虫)も見つけましたよ。虫を寄せるトラップにも、地面を歩くシテムシやゴミムシなどが入っていました。今年もクワガタムシに出会えなかったのはちょっと残念でしたが、みんなで森での生きものたちのふれあいを楽しみました。

午後にはどんぐりの苗畑を観察。3年経って1mを超える高さに伸びたどんぐりの子どもたち、秋にはもっと大きくなっているのかな? 次回はもっと成長しやすくするために、過密になった苗たちを少し間引くことになりました。

動物園ではクマの食糧事情のお話を聞いて最後は動物園の冷蔵庫を見学。園内のたくさんの動物たちの食べ物貯蔵されている巨大冷蔵庫・冷凍庫を見て、動物たちの夏の暮らしを学んだのでした。

動物園ならではの環境教育プログラム、次回も楽しみです!



Information



# あすもり資料室 グランドオープン

あすもりのことや森づくりのことを  
楽しく伝える施設、開設です!

足掛け2年を費やして進めてきたこのプロジェクトもいよいよ完成です。6月22日はあいにくのお天気でしたが、雷鳴のファンファーレが応援してくれる中、テープカットが行われ、「あすもり資料室」がオープンしました。リサイクルについて学ぶエコステ1とこの資料室を合わせて「トドック・エコ・ステーション」。環境や森づくり、あすもりのことを学びに、ぜひ足をお運びください!



テープカットで  
グランドオープン!



でっかい絵本  
がもしろいよ、  
めくって!



あすもり資料室の展示を監修した北海道博物館の企画展が開催されます。シカと森と人のごち、考えてみませんか?

Report

## コープ未来の森づくり基金 2018年度 活動報告・会計報告

2018年度の総植樹は9,398本、全道の「コープの森」で882名の組合員さんに参加いただきました。道民の森植樹祭では育樹祭も合同開催となり、たくさんの親子が参加しました。森づくりに取り組むボランティア「あすもりサポーター」は1,439名(前年比106%)となりました。

道民の森の植樹地「Fの森」では「森づくりワークショップ」を開催し、道総研林業試験場と協働の「市民参加型 樹木成長調査」も順調に進行し、市民参加の特色ある森づくり活動を行っています。

森づくり団体への支援として、高額助成を1団体、小額助成を19団体に、北海道ぎよれんの「魚付林植樹活動」にそれぞれ助成を行いました。

第9回北海道の森づくり交流会では、岩手大学の山本信次氏より、森林ボランティアの可能性について講演をいただき、参加者が森を楽しむプランを考えるなど、各森づくり団体が交流を深めました。

広報では「モリイク」の発行、「モリイクFacebook」を運営しています。

### 2018年度収支一覧

	18年度予算	18年度決算	内容 (単位:千円)
レジ袋積立	23,600	23,223	レジ袋削減ご協力分積立
協賛金 ほか	7,530	5,344	エコ協賛金、企画協賛金、書き損じ/ガキ収益、参加費
収入計	31,130	28,567	
植樹森づくり活動	15,630	16,680	植樹活動、各地区のふれあい企画、森づくり交流会
助成金支援	7,000	6,925	森づくり団体、ぎよれん魚付林への助成、広報費
広報啓発費	2,000	1,663	公報誌「モリイク」
調査研究・基金運営費	6,000	4,378	業務委託、会議運営費、通信交通費など
支出計	31,130	29,646	

## あすもり助成金 給付団体一覧 (2019年度)

高額助成 (活動案件への助成)

- ◆ 森のようちえん 森のたね (中富良野町)  
【案件名】森のようちえん 森のたね  
2019年度活動の継続

小額助成 (団体への助成)

- ◆ 北海道林業技士会 (札幌市)
- ◆ 森づくり調査研究会 (江別市)
- ◆ 森林ボランティア オホーツクの会 (北見市)
- ◆ 当別森林ボランティア シラカンパ (当別町)
- ◆ 間伐ボランティア 札幌ウッディーズ (札幌市)
- ◆ 自然体験活動指導者ネットワーク (苫小牧市) えんりっと
- ◆ いしかり森林ボランティア クマガラ (石狩市)
- ◆ 北海道グッド・トイ委員会 (札幌市)
- ◆ NPO法人 ナショナルトラスト・チコロナイ (平取町)
- ◆ NPO法人 トラストサルン 釧路 (釧路市)
- ◆ 河川愛護団体 リバーネット21 ながぬま (長沼町)
- ◆ 北海道自伐型林業推進協議会 (白老町)
- ◆ 南かやべ森と海の会 (函館市)

## 木育 essay

### 手わたし 後編

【前回まで】 私たち夫婦が、木育の旅で訪れた三重の鋸鍛冶屋の主人は八十歳を超えてなお、現役の鍛冶職人だった。彼に白樺細工の皮の採取用のナイフの相談をする。既製品のナイフを加工するという案も出るが。

鋸鍛冶屋の主人は、奥から出してきた棒状の地金を皆に見せた。「青紙の鋼だよ。これを使って、初めから作ってあげるよ」青紙とは安木鋼の一種で、鍛冶職人が上等な刃物を作るのに、好んで使う材料だという。

「すごいな。青の鋼は彼みたいな腕の良い職人が手をかければ、最高の刃物になるよ」

居合わせた友人が興奮した様子で言ったので、これは大変なことになった、と思った。

刃物といったら、ホームセンターの包丁しか買ったことのない私ごときが、そんな、大層な注文品を作って貰って良いものだろうか?

でも話を聞く内に、欲しくてたまらなくなっていた。両刃にするか? 血抜きは線は入れる? と聞かれて、武器ではなく道具として作って欲しい、と頼んだ。私は女だから。

旅を終えて季節は移り、春になってもナイフができたという連絡はなかった。シラカバの皮を採取できる時期は限られている。六月の終わりから七月半ばまでの短い間しかない。不安の内に思いがけない訃報が届いた。鋸鍛冶屋の主人が亡くなった、という。私たちは強い衝撃を受けた。あの日の夏の晴れ渡った旅空と、彼の力のある笑顔が蘇ってきて心が痛んだ。

「ただ、ナイフはできているようだ。刃は研ぎ出していないらしいけど……」

友人を介して、間もなくそれは私の手に届いた。箱から取り出したナイフはずしりと重かった。それは私が望んだように、どこか丸みを帯びたやわらかさを持つ、道具としてのナイフに仕上がっていた。使い手を守る道具だ、と私は気づいた。作り手からの深い思いやりが、それを命あるものになっている。

ふいに『手わたし』という言葉が、心にうかんだ。ナイフには使い込まれた鈍のような握りが付けられていて、刃もきれいに研ぎ出されていた。これは送ってくれた友人がしてくれたことだ。手から手へ、私のためにしてくれた人たちのことを思う。

それから数年たつが、ナイフの切れ味は落ちていない。彼が請け合ってくれたように、孫子の代までも、もつだろう。だから私もやがてこの美しいナイフを使えなくなる時がきたら、誰かこの道具を必要としている人を見つけて、手わたししようと思っている。その人はこのナイフの物語も一緒に受け取ることになる。作り手やつないでくれた人、そして私の記憶も。ナイフを頼んだあの遠い旅の思い出。それから初夏の森で金色の光を帯びたシラカバの皮を剥ぎ取っていく、あの感触。汗ばんだ肌を冷やす手触りや、甘い樹液の匂いを嗅ぎ、生きることはこんなに幸せなことなのだと感じたあの瞬間も、ナイフは話してくれるだろう。



text/ 齊藤 香里

介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

## Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.18」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか? 右から3つずつお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか? (はい・いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム (P2)  
エコビレッジの取り組み (P3~7)  
木づかい (P8) 大きな木の小さな物語 (P9)  
森のキモイ! キレイ? (P10,11)  
コープの森づくり (P12~14)  
木育エッセイ (P15)



### PRESENT!

アンケートに回答いただいた方から抽選で1名様に、アカエゾマツの精油の小瓶をプレゼントします。深い森の雰囲気を感じてぜひお部屋でお楽しみください。

### 応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。  
応募締切 10/31(木) 当日消印有効

### コープさっぽろ基金事務局

〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号  
FAX: 011-671-5743  
メール: csapmori@todock.coop



携帯メールは  
こちらからどうぞ